

ねこのしまとくまたのみやのおはなし

加賀の国「蛇とむかでと争う島に行く人
蛇を助けて島に住むおはなし」

原典	今昔物語
翻訳	平野 俊也
絵	後 泰夫、南野 康男
協力	吉原町
制作	能美市中央公民館

今から約九〇〇年前、平安時代のおわりに
「今昔物語」という説話集が書かれました。
今昔物語に「今は昔・・・」の書き出しでは
じまる日本各地の一〇〇〇余りの説話（よしはいつまぢり）がおさめ
られています。この中に、現在能美市吉原町に
あります「熊田神社」と輪島市の船倉島（くまたじんじやへぐらしじま）にまつ
わるお話が第二六巻に載っています。その物語
を紙芝居で紹介します。

昔々、加賀の国の郡家ぐんけの里に住む七人の漁師の仲間がいました。

ある日、この七人はいつものように一そうの船にのり、魚つりにでかけました。魚つりには、いつも身を守るためにくさ用の弓や矢もつみこんでいました。

「さあ、出発だ。きょうはいい天気だ。さかながたくさんとれそうだ。」

みんな元気一杯、大漁を願ってはるか沖へ沖へと向かって船をこぎ出しました。

やがて岸も見えなくなり、

「さあ、そろそろつりをはじめるか。」

と、みんなつり糸をおろしましたが、どういわけか、その日はなかなか魚はつれません。





「おいおい、きょうはどうなってんだ。一匹も魚がかかってこん」

みんなが不思議に思いながらもつりを続けている時です。

と、突然あやしげな黒雲があらわれ、突風が吹き出したのです。

「うわっ、大あらしだ。早く岸にげかえろ」

みんな大あわてで、ろをこぎ出したのですが、嵐はますます強くなるばかりです。

船は木の葉のように舞い、ろも使えず、七人はどうすることもできません。

「もうこうなったら、運を天にまかすよりしかたがない」

と覚悟を決め、七人はただただ無事であることのみを祈り続けました。

どのくらい時間がたったのでしょうか。必死に船のへりにしがみついていた七人の前に、大きな島が沖合に見え出しました。

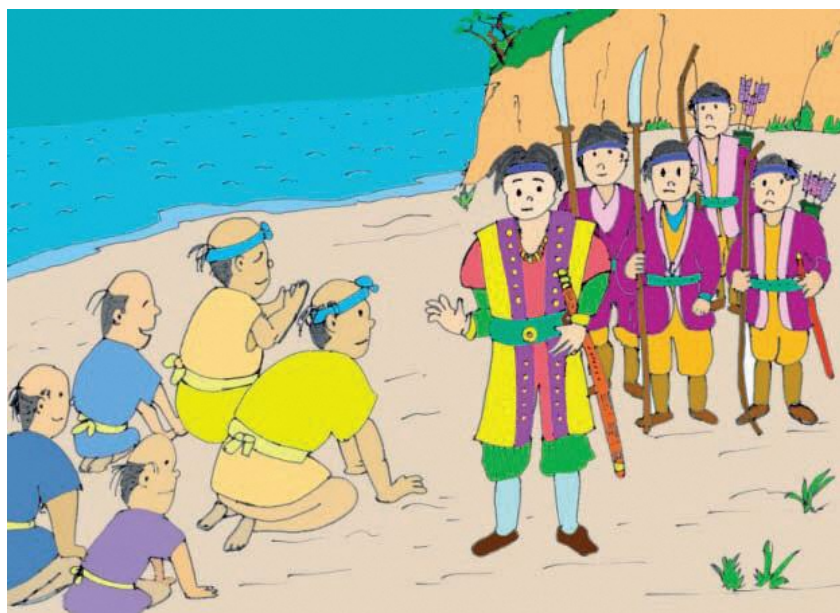
「おおっ。島だ、島だ。島が見えるぞ！」

「よっしゃ、あの島に船を着けるんじゃ。島にあがればなんとかなるぞ！」

みんな大喜びです。元気が体じゅうにみなぎり（助かるぞ）と思いながら島に向かってろを力いっぱいこぎ、ようやく上陸しました。

よくよく島の中をみれば、島は木々にかこまかれ、川も流れ、食べ物などもたくさんあるようでした。





みななほっとしてたたずんでいる時です。浜辺の向こうの方から、二十歳ばかりの美しい若い男を先頭に、数人の人が現れたのです。七人の漁師は

「おお、人が住んでいるぞ。よかった、よかった。」

と、喜んでいると若い男は、

「ようこそおいでました。実は私が皆さんをお呼びしたのです。おわかりでしたか。」というのです。

「いやいや。知りませんでした。わたしたちは、いつものようにつりをしていると、突然、嵐にあってどうすることもできず、流されているうちにこの島を見つけ、必死に上陸したのです。」

すると、若い男は

「じつはその嵐はわたしが起こしたんですよ。」
というのです。それを聞き、「この人はただものではないぞ。」

漁師たちはこわくなってきました。

ところが、若い男はにこにこ笑いながら

「あなたたちは、とてもおなかがいっぱいなのでしょ
う。食べ物をお持ちしましょう。」

そう言いながら、

「おい、すぐお持ちせよ。」

手をパンパンとたたきながら大声でさげびました。
すると数人の足音とともに酒のかめはじめ長びつが二
つ運ばれてきました。長びつを開くとおいそうな食べ
物がたくさん用意されていたのです。

「さあ、おつかれでしょう。遠慮えんりょせずにお上がり下
さい。」

若い男のすすめで、朝から何も食べていなかった漁
師たちは、おなかいっぱい食べたり、飲んだりしまし
た。





漁師たちはおなかもふくれ、ひと休みしていると、先ほどの若い男がそばに来て、こんなことを言うのでした。

「あなたたちをこの島に迎えたのは、おたのみがあったからです。実はこの島の沖にもう一つ島があります。その島の主は、わたしを殺してこの島をうばおうとやって来るのです。今までも何回も攻めてきたのですが、そのたびに戦い、追いつ返してきました。実は明日その敵が攻めてきて、わたしと最後の生死をかけた勝負をするところになっているのです。それで、このわたしを助けてもらいたいと、あなた方をお迎えしたわけです。どうかお助けて下さい。お願いします。」

それを聞いて、びっくりした漁師たちはたずねました。

「それでその敵の軍勢は何人くらいですか。また船はなんそう来るんですか。たえ、どれほどの敵であろうとも、ここへきた以上は命をかけて、あなたの望みに従いましょう。お約束します。」

それを聞いて若い男は大変喜び、次のように言いました。

「いや、攻めてくる敵は人間ではないのです。実は敵を待ち受けるわたしも人間ではないのです。明日のいくさが始まるかわかると思います。」

思わぬ言葉に漁師たちはびっくりするとともに、なんとなく気味が悪くなりました。

そんな釣り人たちにかまわず、若い男はさらに言葉を続けました。

「明日の戦いはこんなようになります。敵が島に攻めてきて、島にあがろうとする時に、わたしはこの山の上から降りていきます。今までは、敵をこの滝の前にあげないうちに、海岸で戦って追い返しました。しかし、明日は、あなた方という強い味方がいますので、わざと上まで登らせませう。敵は上に登ると戦いやすいと思って喜んで登ろうとするでしょう。その時には、しばらくわたしに戦いをまかせて下さい。もし、わたしが不利になれば、あなたたちに目で合図をします。合図があれば矢をあらんかぎり射して下さい。決して敵をあなどってはいけません。」





「戦いはいつ頃から始まるのですか。」

「明日の巳みの刻こく（午前十時）より準備し、午うまの刻こく（午前十二時）より始めるつもりです。あなたたちは十分に食べ物をとり、力をつけてこの岩に立っていて下さい。お願いします。」と言うと、若い男は森の奥に行ってしまうました。

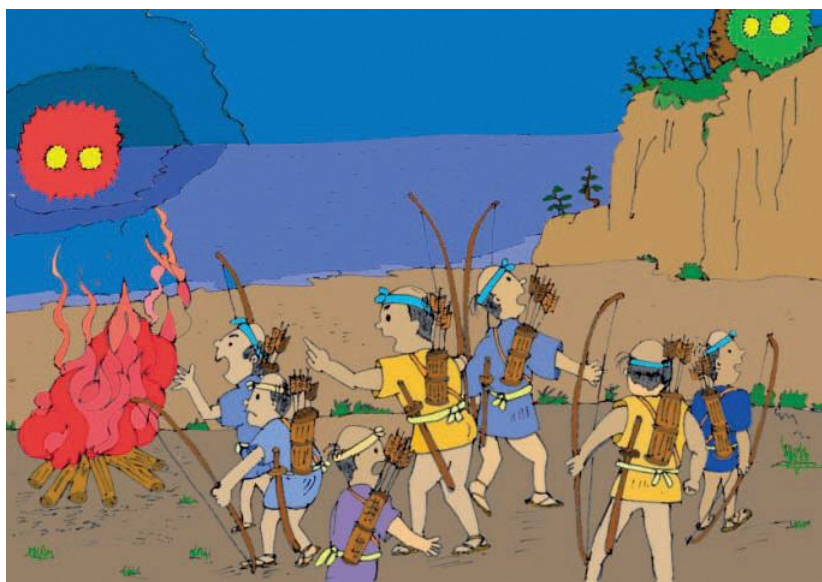
漁師たちは、若い男の言葉を聞くと、早速岩の上の木などを切り、小屋をつくりました。そして矢をとき弓のつるを張ったり、明日の戦たたかいの準備に入りました。

その夜は、一晩中火をたき、互いに明日の戦のことを話しながら過ごし、夜明けとともに食事をとり、戦いに備えました。

巳の刻が近づくと七人は弓矢を持ち、岩の上で
敵が来るという沖の方を見つめました。

すると沖の方から風が吹き出し、真っ黒な雲が
広がり、海面が盛り上がってきたのです。七人は
思わず弓矢をにぎりしめました。と、海の表面が
真^まっ青^{さお}に光り、その中より大きな火の玉が二つ浮
かび、こちらをにらんでいます。

びっくりした七人は、「山の方は？」と振り返
ると、山の木々や草があわただしく揺^ゆれだし、突
風とともに大きな音がして赤い火の玉が二つ現
れ、沖の方をにらんでいます。



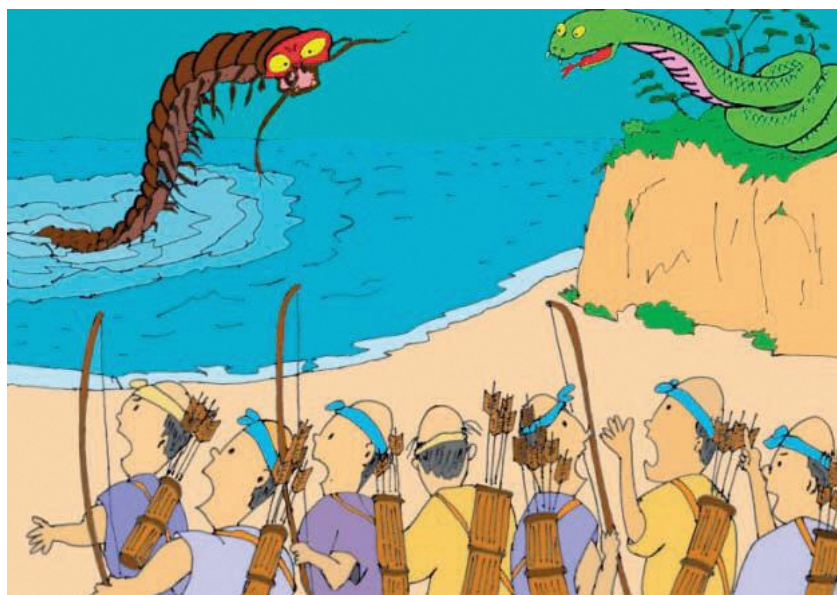


やがて沖の方からしだいに波が高くなり、何かが近づいてくるので、よく見ると、それは、
十丈（約三〇メートル）もあろうかと思われる大ムカデでした。日の玉は青く光り横腹は赤く光っています。

山の方を見ると、これも十丈もあろうかと思われる大蛇が姿をあらわし、舌なめずりし、ムカデと向かい合っています。まさに言葉にあらわせない恐ろしい光景です。

漁師たちは、じっとひそんで見ていると、大蛇はきのう言ったように、山の上でかま首を持ち上げたまま降りてきません。これを見たムカデは「しめたっ!」とばかりに岸に上がって攻め込みました。そして、お互いにぎらぎらと燃えるような目を向き合ったまま、にらみあっています。

漁師たちは、教えられたとおりに、岩の上に立ち、弓矢をつがえつつ、戦う大蛇の目を見つめ、合図を待っていました。





にらみあっているうちに、ムカデが勢いよく大蛇とと
びかかると、大蛇も負けずとどびかかり、激しいかみ合
いとなりました。互いに血まみれになって激しく戦って
いますが、次第に手足の多いムカデが優勢になっていき
ました。

二時間ばかり、かみ合いしているうちに、ムカデが上
にのり、大蛇はだんだんつかれがみえるようになりまし
た。漁師たちは心配になってきました。

「おい、まだ大蛇からの合図はないのかい。」

「どうしてるんだ。あのままじゃ殺されてしまう
ぞ。」

その時です。大蛇は漁師たちの方を向き、苦しそうに
目くばせをしたのです。

「それっ合図だ。弓を射かけるぞ。」

漁師人たちは一斉にムカデをめがけて矢を放ちました。ムカデの頭からしっぽまで矢はどんどん当たっていきます。

「矢のなくなるまで、どんどん射るんだ。」

七人は一心不乱に射続けます。全身に矢傷を負ったムカデはのたうち回っています。

そのうち、七人の矢はすっかりなくなってしまいました。

「さあ、相手は弱ったぞ。こんどは刀で切り込め！」

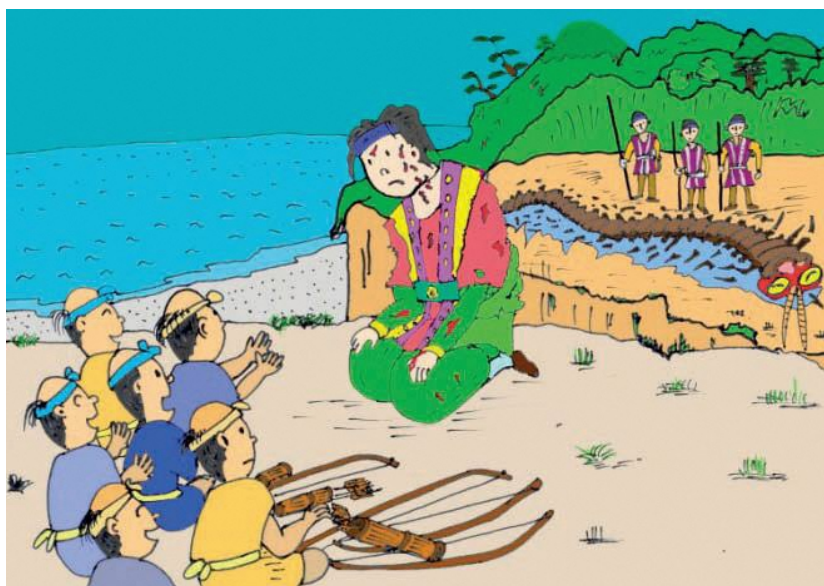
七人は、ムカデをめがけていっせいに飛びかかりました。

「早く手足を切ってしまうんだ。」

これには、さすがのムカデもたまりません。蛇を巻き付けながらとうとう倒れてしまいました。こうして、七人はムカデにとどめを刺し、完全に殺してしまいました。

ムカデから離れた大蛇はずるずると、どこかへ姿を消してしまいました。





ムカデとはげしい戦いをした七人はさすがに疲れ、ほっと一息ついていると、きのうの若い男が片足を引きずりながらやってきました。顔にも傷が付き血がにじみ、大変疲れているようでした。そのようすをみて、漁師たちは

「この若い男が大蛇だったのか。」
と気がつきました。若い男は

「みなさん、助けていただいてありがとうございます。お疲れでしょう。ものども食べ物を持ってこい。ていねいにおもてなしをするんだ。」と大変喜び、あつくお礼を言いました。そして、浜にころがつているムカデの死体を指さし、家来たちに向かって、

「ムカデをばらばらに切り、山の木を切って焼いてしまえ。灰は遠くへすてるんだ。」と命じました。

やがて若い男は、漁師たち向かって言いました。

「わたしたちはあなたの方のおかげで、この島を平和にすることができ、大変感謝しています。この島には魚も多くとれ、たんぼの作れるところも多くあります。また畑にできる土地はいくらでもあり、果物のなる木もたくさんあります。日々暮らして行くには、豊かでくらしやすい土地です。ぜひこの島に住んでいただきたいと思います。」

「それは大変うれしい事ですが、わたし方には国に残した妻や子どもがいます。」漁師の一人が答えると、若い男は

「それじゃ、家族をこの島につれてくればいいじゃないですか。」と言ったのです。

「そんなことができるのですか。」

「たやすいことです。加賀の国に渡るにはこちらから風を吹かして送ります。向こうよりこちらに来るには、あなたの国にまつてあります熊田の宮にお参りすれば、簡単にこちらに来ることができます。熊田の宮はわたしたちの一族を祀ってあるとても縁の深いお宮なんです。」というろと教え、帰りの道中の食べ物もたくさん差し出しました。

やがて七人は島より船をこぎ出し、海にでると追い風が吹き出し、たちまちのうちに加賀の国の郡家の海岸に帰ることができました。





七人の漁師は、それぞれ自分の家に帰り、島のできごとを家族にくわしく話しました。家族は驚くとも無事に帰ったことを何よりも喜んでくれました。また、となり近所の人たちにも。

「こんなわけですから、いっしょに島に行きたい人は連れて行ってもいいですよ。」
とひそかにさそいました。

こうして、島で作る作物の種をはじめ荷物を準備し、七そこの船を用意しました。

そして、島の若い男にいわれた通り、熊田の宮にお参りし、旅の安全と島に行くことを報告し、密かに船に乗り込みました。乗り込むと同時に、島に向かって風が吹き出し、七そこの船は風に押されながら無事に島にたどり着くことができたのです。

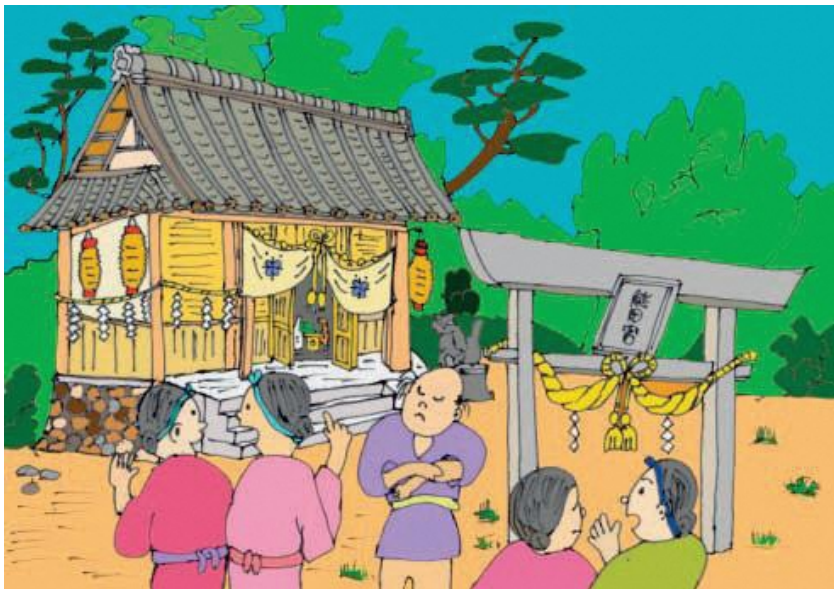
その後、その七人の人たちは島に住み着き、漁をし、田畑を耕しながら生活しているうちに人も多くなり、年々栄えるようになったということです。島の名は『ねこの島』と呼ばれ、島の人たちは、年に一度は必ず加賀の国に渡り、熊田の宮を祭るようになったのです。

しかし、加賀の国の人たちは

「もうそろそろ祭りだが、島の人たちはいつ来るのかな。」と思っても、一度もその姿を見た人がないので、急に夜中にあらわれ、祭りをすませてすぐに帰ってしまうようです。夜が明けてから祭りをやったらしい跡をみて、

「おや、島の人たちゆうべきて祭りを行ったのか。」と村人たちはあとで気がつくだけです。

熊田の宮の祭りは、毎年の祭りとして行われ、今も続いているということです。



【その後のねこの島】

「猫の島」は能登の国鳳至郡ふけしぐんの大宮というところから、よく見えます。晴れた日、はるか海上を見ると、島の西の方が高くなっており青々とした島が見渡せます。

能登の国黒島に住む常光つねみつという船乗りが、嵐にあってねこの島に着いたことがありました。着くと島の人たちが出て来ましたが、島にはあげてくれませんでした。そのため嵐が静まるまで七、八日ばかり、船を岸につないでいましたが、食物はもらえても、島に上がることは許してもらえませんでした。そうしているうちに島の方より風が出てきて、ようやく能登の国に帰ることが出来たのです。その後、常光はその時のことを思い出して、「猫の島を海岸より少し見たのですが、島にはたくさんの方々があり、京の都のように道がたくさんあり、多くの人が行き交っている。」と語っています。きつと島の人々は島の様子を見せまいと近寄せてくれなかったのです。

近頃では、船で遠く唐かうの国からきた人は、まずその島に立ち寄って食物などを買い、アワビなどを取ってから、敦賀の港に行くそうです。しかし、その時も唐の国の人には「こんな島があることを人に言わないで下さい。」と、島の人々は固く口止めするそうです。

こうして、七人の漁師たちはその島に住みつき、その子孫の人々も代々その島に住んで楽しくおだやかに暮らしていたと語り伝えられています。

知つとるけ

能美の民話

二〇一四年一月三〇日 発行

編集・発行

能美市立博物館

〒923-1246

石川県能美市倉重町戊80

TEL 0761-52-8050

印刷

(株) 共同印刷